

社会変革の担い手として一ポストコロナ時代のために「個」を磨く

辻村みよ子（東北大学名誉教授・弁護士、

昭 47 法、50 修・53 博卒、法学博士）

## 一 一橋大学のダイバーシティ推進

卒業生の皆さん。本日はご卒業まことにめでとうございます。保護者の皆様や、学長はじめ諸先生方にも心よりお祝いを申し上げます。

一橋大学では近年、全学的な男女共同参画と多様性を進める取組として、「ダイバーシティ推進本部」を設置して、活動されております。卒業式の来賓あいさつも、これまでは大企業トップの OB の方が殆どでしたが、今年は私が OG の一人として登壇させて頂くことになりました。これもダイバーシティ推進の表れと思いますので、光栄な機会を頂き、感謝いたします。

## 二 「コロナ世代」として

さて、ご卒業される皆さんは、ロシアによるウクライナ侵攻によって世界の平和が脅かされ、国内外でパンデミックが拡大して不安な生活を余儀なくされた運命的な「世代」になりました。私は「ジェンダーと人権」という講義を 2021 年春まで 8 年間担当していましたので、皆さんの中には、1 年次もしくは 2 年次に講義を聞いてくださった方が、200 人位居られるかと思いますが、最後に直接お会いできて本当にうれしく思います。皆さんは、講義がオンラインになるなかで、ビデオを 1.5 倍速でみて単位をとられた方が多いと言われていますが、残り

の時間には、社会の変化をしっかりと見届けられたのではないのでしょうか。キャンパス生活を十分楽しむことができずアルバイトやコンパなども減るなかで、自分の生活を自己管理する力をつけ、「ピンチをチャンスに変える」術（すべ）を、この期間に修得されたのではないかと思います。まだそれができてない、という方も、これからの社会とのつながりのなかで、それを修得してほしいと思います。

### 三 1968年の頃——大学紛争とアンコンシャス・バイアス

社会とのつながりという点で、私の大学時代のことを少しお話しさせてください。一つは、「大学紛争世代」のことです。私自身が入学した1968年は世界同時多発的にパリ五月革命のような大学の紛争が起こった年で、フランスではsoixante-huitard という特別な言葉がある位です。日本では東大の安田講堂封鎖などが有名ですが、この一橋大学でも「大学管理法」に反対する運動があり、一部の教員も含む本館占拠・封鎖や授業のボイコットによって1年近く講義がない時期がありました。この兼松講堂では大衆団交（いわゆる団交）が行われ、（過激派だけでなく）一般学生の皆がクラスや部活の単位でデモに行ったという時代でした。この運動はベトナム戦争反対の市民運動や安保反対闘争、反公害住民運動などにもつながって、一般学生たちも皆、否応なしに社会や政治との関わりを痛感することになりました。私がその後、大学院に進学してフランス革命期憲法の研究を中心に憲法学者の道を選んだこととも関係があるように思います。日本では、校則などで高校生のデモが禁止されていて経験も関心もない人が殆どだと思

いますが、社会科学を学んだ皆さんは、政治問題や経済状況に無関心ではられないことを十分認識しておられると思います。

もう一つは、性差別や性別役割分業構造を実感したことです。入学当時の一橋大学では、一学年780人中女性が10人、法学部も160人中2人でした。「女性なのになぜ法学部に入ったのですか」と質問攻めにあうような時代で、大学院で憲法研究者になる道を選択した後にも、「憲法学は女性にはむかない」とか、「なよなよ」した女性には、天下国家の問題は教えられない、などという理由で、私だけ長い間就職ができませんでした。私は1年生の時から端艇部で鍛えて全日本にも出ていましたので、声も大きく、決して「なよなよ」してなかったのですが、当時の学会でもこのような偏見が日常的に存在していました。これは、いわゆるアンコンシャス・バイアスで、無意識の偏見として、現時点でも問題になっていることです。これがもとで、私はその後、ジェンダー法学会の創設に関わり、内閣府男女共同参画会議員等を長く務めることになりました。東北大学教授として単身赴任した時は、全国の国公立大学法学部初の女性憲法学教授でしたが、男女共同参画委員会副委員長を一二年間続けて、学内保育園を4つも作って男性職員の皆さんに感謝されたこともありました。

#### 四 ポストコロナ時代の社会と家族の変容

1) このように、大学時代の経験が、その後の人生に大きな影響を与えることは確かです。皆さんも、大学で学んだことを生かして将来の夢に向かって進む人

生像を描いておられることと思います。ただ、現在はまさに「変動の時代」で、ポストコロナの時代がどのようなになるか不安です。世界でもグローバル化やIT化の進みが早く、会社ではリモート勤務の形態や遠隔会議、ワーケーションなども取り入れられて働き方も変わっています。

このような変化によって、会社や職場のルールが変わり、従来の企業社会中心の団体主義的な慣行が見直されて、多様な個性を重視する方向に向かうでしょう。皆さんがどんな職業についても、これまで以上に自己決定できる能力が求められ、個性重視の環境の中で個性を「磨く」必要が出てくると思います。

2) 多様性、ダイバーシティを重視する傾向は、同時に家族のあり方も変えてゆきます。高度経済成長期では核家族（稼ぎ主の夫と専業主婦と子供から成る世帯）がモデルとされたのに対して、いまでは専業主婦世帯は28%で大多数が共働きです。また、単独世帯が38%に増加し、2040年には39%を超えると予想されています。人口の4割が一人暮らしというのは異常なことではないでしょうか。

晩婚化、非婚化、少子化もさらに進み、現在でも30歳時点の未婚割合が女性4割、男性5割を超えています。50歳時点で配偶者がいない割合も非常に高く、男性の「生涯未婚率」は、1980年には2.6%だったのに、2022年にはその10倍の28.3%に増加しています。女性の「生涯未婚率」は、現在17.8%で6人に一人ですが、男性では皆さんの3人に一人が結婚しない、あるいは結婚できない、ということになりそうです。さらに、結婚しても、離婚件数が現在で

も婚姻件数の約3分の1を占めていますので、家族が多様化して、どんな人生になるのかわからない、ということがいえそうです。このことは、同時に、道は一つではなく、選択肢がたくさんあることをも、意味します。

## 五 性別役割分担意識の克服を

1) 他方で、このように家族や社会が変わっているのに、意識の点ではまだ戦前の家制度を引きずったような考え方が残っているようで矛盾があります。「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という質問に賛成か反対かを問う世論調査が、1990年代から継続して実施されています。この設問自体が時代遅れでナンセンスであると言って笑われてしまうのですが、2019年の調査でもまだ、このような性別役割分担を肯定する意見が全体の40%を占めています。70歳代・60歳代の男性がそれぞれ50%・40%と多いのですが、20歳代男性も、33%という調査結果です。是非とも、このような時代遅れと言われるような意識を変えてほしいと願っています。ちなみに、欧米ではこれに賛成するのは1割に満たないことがわかっています。

2) 世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数においても、日本は、政治分野は146ヵ国中139位で、世界でワーストテンに入っています。日本の女性衆議院議員比率9.9%が世界190ヵ国中165位で、アジア諸国の平均の半分以下で、平均の足を引っ張っているのが日本であることも事実です。講義では、いつも「日本がそんなにひどいとは聞いてない」という意見が出ますが、私

の答えは簡単で、「学校では日本の都合が悪いことは教えないのです」と答えてきました。たしかに、高等学校までの教科書のレベルではこのようなことは学ばないのですが、皆さんは、リベラルアーツの最高峰、社会科学の殿堂と言われる一橋大学で学んでおり、知らなかったではすまされないでしょう。このような日本社会や政治状況を理論的に分析して、改革の道を示すリーダーになって頂きたいと願っています。

3) 女性の皆さんも、これからキャリアウーマンの道を進まれることと思いますが、男女雇用機会均等法によって大企業では男女格差がなくなってきたとはいえ、相変わらずの長時間労働を女性も男性と同じように強制されることになり、結婚や出産ができない、というのが現実のようです。これは、いわゆる「男性並み平等」になっただけのことであり、男性の労働権や幸福追求権も、また同時に制約されている、という点に注意して頂きたいと思います。男女とも、人間らしく健康で文化的な生活を送って、子供が欲しい場合にはいつでも生んで育てられるような社会を作るように、社会変革のために、皆さんが勇気をもって、連携して取り組んで頂くことを願っています。

私自身も、キャリアウーマンの先駆者のように言われ、これまで相当無理をして、家族にも大きな迷惑をかけながら、我武者羅に仕事をしてきました。しかし、私の場合は、一橋大学名誉教授だった研究者の夫と2人の娘（一人は経済学部教員）からなる4人家族を築いてきたことが、その原動力となりました。実際、家族のサポートがなければ、何もできなかったのが事実です。皆さんにも、自己決

定権を尊重しつつ、できれば、新しい家族・家庭を作って、協力しながら、キャリアを高めていってほしいと願っています。

六 「個」を磨いて、社会変革の「担い手」として、

皆さんは、コロナ禍の中で耐えた世代ですが、ようやく、その経験を踏まえて、社会に飛び出す時が来ました。どうぞ自信をもって—そして少し自信がない人はこれからの自覚的な鍛錬によって—「個」を磨き、このような日本社会を変革する「担い手」になってください。「変動の時代」だからこそ、どうか皆さん、恐れず、ひるまず、ピンチをチャンスに変えて、前向きにチャレンジしてください。

これからも辛いことや、場合によっては種々のハラスメントなどに遭うことなどもあるかと思いますが、そのときは、まず、「ピンチのときこそ、顔を上げて初心にもどる」こと、また、「個人の尊重」や人権などの基本原理に立ちかえること、さらに、友人のネットワークや弁護士などの専門家を頼ること、などを通じて、乗り越えていってほしいと思っています。

皆さんの前には、たくさんの道があります。道は一つではないのですから、引き返してもいいのです。自分を信じて、最良の道を選んで、力強く歩んでください。きっと、一橋大学の先生方、友人たちから得た知識や経験、友情が、皆さんを助けてくれるでしょう。

皆さんに、心からのエールをお送りして、お祝いの言葉とさせていただきます。これからも新しい社会で「前に」進んで下さい。

最後に、保護者の皆様、大学関係者の皆様に、もう一度お祝いを申し上げ、私の祝辞とさせていただきます。本日は、まことにおめでとうございます。